

らが担当する事業を俯瞰し分析する事例研究と、事例研究の比較分類による類型化やパターン認識により、事例ベースの知見を普遍化するという地域産学連携活動の構造化を図ることをテーマとして議論が進められた。

最初にセッション全体の構成を説明した後、パネリスト及び座長から分析対象となる事例についての説明が行われた。事例説明では、入野(愛媛大学)より地域産業(水産業)界と自治体が大学と連携して取り組む産学官連携事業について、林(山口大学)からは地域を担う人材を育成するためのアントレプレナーシップ教育を地域の自治体と協働で継続的に実施するための課題について、そして西川(県立広島大学)からは、自治体の施策に大学が一体的に参画する取組について、観光資源開発、観光振興計画策定、地域の産業人材の確保・育成の3事例について、それぞれ報告がなされた。その後、座長より各事例を分析・整理し概念抽出を行った結果の説明があり、①経済的側面、②受け皿問題(実施体制)、③経験とノウハウ(専門知識とスキル)、④地域社会との関係、の4要素が共通する論点・検討項目として提示された。

後半のセッション参加者(聴講者)との討論では、議論の視点と論旨を明確にするために、この4つの論点・検討項目を(Ⅰ)地域の人材育成(高度な専門人材の確保・育成)、(Ⅱ)地域コミュニティー(事業承継が可能な)、(Ⅲ)経済的持続可能性(地域の財源)、の3つの視点に整理したうえで会場との討論が進められた。早朝にもかかわらず大勢の参加者があり、積極的に質問や意見が飛び交う討論会となった。およそ40分の討論時間中、質疑応答が途切れることはなく、かなり専門性の高い質問もあったことから、座長が学術的背景について言及するという一幕もあった。学術的分野としては、行動経済学や起業論、地域のエンパワーメントに関する知見を導入するという試みが紹介され、それに関しても積極的に質疑応答が行われた。時間的制約もあり議論は途上であったという印象が強いが、最後に3つの視点とそれぞれの背景にある学問的領域の全体像を提示し、今後の実証研究に繋げていくという方向性を確認して本セッションは閉会となった。

人材育成2

座長 小野浩幸/山形大学

6月16日(金)第2日目D会場(13:00~14:00)

本セッションでは、産学連携による学生等の人材育成に関する4件の発表が行われた。次代を担う人材の育成に関するユニークな取り組み事例の紹介とともに、その育成結果や育成法の有効性についても言及した興味深いセッ

ションとなった。

最初に山口大学から3件の発表が行われた。李らは、山口大学において全学的に取り組まれている知財教育実践プログラムに関して、その定着に向けて知的財産センター以外の教員が教育を担うことができるような教材開発について発表した。木村（友）は、文系学生を対象とする知財教育実践事例について報告した。現実の商標のライセンス事例を素材として自らが戦略及びパッケージデザインを考える試みや、先行特許を調べて、それをもとに新たな製品を製作する試みなどが紹介された。陳内らは、技術移転活動に関し、研究シーズから事業化まで全体俯瞰する研修の有効性が指摘された。前述の山口大学知財教育実践プログラムの他大学への展開事例の一つとして農学系の大学への展開について紹介があった。土日集中講義1単位で実施され、現在の農業が直面する課題に対し知財を活用して解決する内容で取り組み、事後アンケート調査の結果から知財に関する関心の高まり、農業と知財の関連への気づき、キャリア意識の高まりといった効果があったことが発表された。

次に、静岡大学の木村（雅）らからは、浜松地域で取り組まれている地域連携による人材育成「**Top Gun** 教育システム」の取り組みについて報告された。これは主として小中学生を対象として理数系教育を産学官連携で進めることを目指したものであり、小学生を対象にした算数ゲーム大会「**MATH** やらまいか」や、小中学生の理数プレゼンテーションコンテスト、優れた理科学研究を表彰する **Top Gun** 賞などが紹介された。

以上